

さがける 科学人

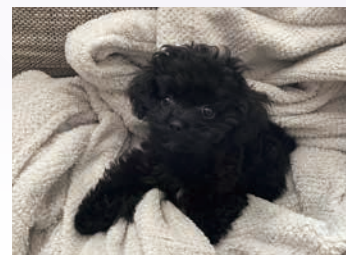
vol.118

鈴木 俊貴 Suzuki Toshitaka

京都大学 白眉センター 特定助教

Profile

東京都出身。2012年立教大学大学院理学研究科生命理学専攻博士後期課程修了。博士(理学)。日本学術振興会特別研究員(SPD)、東京大学教養学部学際科学科助教などを経て、19年より現職。22年より創発研究者。



最近飼い始めた愛犬「くーちゃん」です。飼主の気持ちを理解しているような行動に、いつも驚かされます。



「ヒビヒ(タカだ!)」という仲間の鳴き声を聞いたシジュウカラが空を見上げる様子。天敵の種類ごとに異なる警戒の鳴き声を使い分け、情報を共有しています。

Q1. 研究者を志したきっかけは？

A1. 幼少期から生き物に夢中 卒業テーマを求め各地へ

子どもの頃から、生き物が世界をどのように見ているのかを知りたいと思っていました。小学校の自由研究では、毎年ヤドカリや昆虫など対象の生き物を1つ決めて1年間観察し、日記にまとめ提出していました。生き物への好奇心や感じた疑問を解き明かしたいという思いは幼い頃から今までずっと一貫しています。

大学2年の時に動物行動学という分野を知り、興味を持ちました。卒業研究では、多くの学生が指導教員から研究テーマをもらう中、僕は本当に研究したいと思えるテーマを探すために、いろいろな地域へ出かけました。そこで出会ったのがシジュウカラです。

音楽経験があり耳が良かったせいか、シジュウカラの鳴き声の種類が他の鳥よりも多いことに気づき、状況に応じて鳴き声を使い分けているのではないかと考えるようになりました。この疑問が卒業研究のテーマとなり、今の研究につながっています。

Q2. フィールドワークの特徴は？

A2. 天敵との遭遇を剥製で再現 森林の中で毎日10時間以上も

動物行動学では、高度な言語能力はヒトだけが持つ性質であり、動物の鳴き声は単なる感情で、単語や文法は存在しないとされてきました。しかし、僕はシジュウカラの鳴き声を分析していく中で、その考えに疑問を抱くようになりました。

ヒトの言語は、モノを指し示したり、文法のルールを当てはめたり、過去や未来を想像するなど、さまざまな認知能力の集合体です。その個々の能力に着目すれば、ヒト以外の動物においても言語の機能を見いだせるはずだと考えました。そこで、認知科学や言語学、動物学を融合させた新しい枠組みである動物言語学を打ち立て、研究を進めることにしました。

フィールドワークでは主に、シジュウカラがどのような状況でどのような鳴き声を使うのか、さらに、各鳴き声を聴かせた際に、どんな反応をするのか調べています。天敵との遭遇など、滅多に見られない状況で発する鳴き声に関しては、ヘビやタカなどの天敵の剥製を呈示して、人為的にある状況を作り出す工夫もしています。森林の中での調査は毎日10時間以上に及びますが、地道なデータ収集の結果、シジュウカラの鳴き声には天敵の種類を示す単語や、異なる鳴き声が組み合わせられた文章があることがわかってきました。

Q3. これから研究者を目指す人に一言

A3. 見たもの、考えたことを大切に 「失敗」ではなくて、新しい発見かも

本や論文に書いてあることは、過去に誰かが見て考えた世界の解釈の1つです。皆さん一人一人違った価値観や観察眼があるはず。もちろん本や論文で学問の流れを勉強することも大事ですが、自分で見たもの、考えたことを大切に探究を続けることが、独創的な研究につながると信じています。

もちろん、思った通りの結果が得られない時もあるでしょう。しかし、それは失敗ではなくて、既存の知識では予想できない新しい発見が隠れているのかもしれない。僕は、研究を続ける上で、そういった姿勢を忘れないように心がけてきました。

シジュウカラのことを知れば知るほど、研究の楽しさと興味が増えますし、誰も知らない世界への扉を開いたような気持ちになります。論文として発表できた時は、毎回達成感が得られます。

シジュウカラの鳴き声研究から
動物言語学の創設へ。

